

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

2011年4月30日設立

設立のきっかけ

東日本大震災発生直後から

「被災地に何かできることはないか」という多くの学生の声が大学に寄せられたこと

をきっかけにボランティアバスが派遣され、23名で岩手県大槌町、陸前高田市を訪れました。

目的

東日本大震災の被災地に継続的に神戸大学生を送り込み、被災者に寄り添う活動を行い、被災者の自立を支援し被災地の早期復興を図ること

震災後避難所や仮設住宅で生活されている方々へのケアを中心に実施。



参加者の声

今回参加して感じた事は、継続的な支援の重要性だ。現地の方はよく、「忘れられることが一番怖い」「ボランティアが来てくれるだけで嬉しい」とおっしゃる。「私達は忘れていません」このメッセージを届けるために、これからも現地に通い続けるつもりだ。

ほんとに何の変哲も無いところに津波がきて、「この町を特別にしてしまった」でもだからこそ、自分が来てこの町が好きになって、僕にとって特別になった。僕にとっては何より会いたい人がいるのと、ご飯が美味しいのと会いたい仲間が居る場所が陸前高田です。

初めて東北に行きましたが、思ったよりも復興が進んでいないというのが最初の印象でした。

目的

阪神・淡路大震災の被災地域でのボランティア活動を通して当該地域に貢献する。また、震災やその教訓について学び、学生企画の防災プログラムの実施や震災伝承を通して、しなやかなまちづくりに寄与する。

将来予測される災害に備えるため、東日本大震災の被災者の声を神戸で語り継いでいく。そのために、語り部の担い手となる学生を育成する。

岩手県大槌町で行われているお祭りに学生を送り込み、祭りの盛り上げに寄与する。また東北の文化を神戸で広げ、東北に関心を持つ学生を増やす。

また、神戸で得られる阪神・淡路大震災の語り部活動に関する知見を東北の方々に提供し、震災を経験していない者としての語り部のあり方を共に模索する。

参加者の声

震災についてだけでなく震災の前、そして震災が起きてから今も続く暮らしについても考えるきっかけがうまれた旅だったと思う。私たちがすぐに今の日本の防災意識を変えられるわけではないと思うが、考えることをやめてはいけなと強く感じた。

私の地元は絶対に津波が来ないので本当に実感が湧かなかった。ただそんな中で当事者意識を持った防災活動をするにはどうすればよいのか、一人一人の行動から始まるのだろうが、悩んでまだ答えや解決の糸口が出ていない。

大川小学校で語り部の方が経験に血を通わせる事が大切と仰っていて、戦争やほかの災害でも報道では被害の人数や被害の状況を伝えるだけだが、被害にあった人にもそれぞれの人生があることを忘れない事が大切だと感じた。



第61次東北派遣

神戸大学ボランティアバスプロジェクトは2024年8月24日（土）～27日（火）の4日間で岩手県・宮城県に61回目となる派遣を行いました。郷土芸能の文化保存支援や、震災遺構での学習、現地学生との交流と震災の語り継ぎを実施しました。現地でボラバスOGも参加くださいました。

郷土芸能支援 ～浪板大神楽・吉里吉里祭り～

今回で2回目の参加となる岩手県大槌町の吉里吉里祭り。地域の郷土芸能団体の一つ、「浪板大神楽保存会」さんのメンバーとして参加し、手踊り「甚句（じんく）」や獅子舞演舞「四方固め」の「ささら」役を担いました。活動時間は13時間にも及び大変でしたが、お祭りはとても盛り上がりました！



震災学習

ホテル観洋語り部バス・吉里吉里国・いのちをつなぐ未来館

様々な人とのご縁を頼りながら、宮城県南三陸町、岩手県大槌町・釜石市において私たちの目指す「震災の語り継ぎ」を学ばせていただきました。



震災の語り継ぎ

～東北大学SCRUMとの交流～



2回目の交流となり、宮城県名取市閑上地区で震災遺構をめぐりました。せんだいメディアテーク内に移り、私たちボラバスのもう一つのフィールド「阪神・淡路大震災」に関する語り継ぎを聞いてもらいました。同じ震災伝承を行う仲間だからこそ、苦楽を理解し合った時間を過ごすことができました。

